# 第Ⅲ部
# 研究の総括







# 第１章　学校評価

## １　はじめに

本年次研究を学校評価(全校生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価，11月実施)の結果から見取る。アンケートの質問項目は，本校の教育目標「自立と共生の力をもつ生徒の育成」の具現化を図り，その達成状況や達成に向けた取組の適切さなどを評価するために設定した。その中から，本校の今年度の研究実践の有効性について考察できると考える質問項目を選び，その結果を以下にまとめる。また「持続可能な社会の実現に貢献する実践者の育成」に関する生徒の姿を見取るため，令和３年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査(３年生５月実施)の結果を参考にする。

## ２　全校生徒・保護者へのアンケート，教員の自己評価から

**表１**の評価項目については①～③が「研究の成果を具現化するための手立て（取組指標)」，④～⑥が「研究の成果を具現化した生徒の姿（成果指標)」である。手立てに対する評価，その結果としての生徒の現状の姿，その両方から評価することとした。

評価の数値は，評価基準を４(そうだと思う)，３(だいたいそうだと思う)，２(あまりそうだとは思わない)，１(ぜったく思わない)の４段階で設定して，教員・生徒・保護者それぞれに調査を行い，その肯定率（４と３の割合の合計）を求めたものである。総合評価は，教員・生徒・保護者の肯定率１％を１ポイントとしてその平均値で成果を見取った。

### (1)　研究を具現化するための手立て

①～③のいずれの項目も肯定率がおおむね良く，良好な結果になっている。これは，学び合いを取り入れた学習指導の工夫，教科の学びをつなぐ学習展開や題材の工夫，仲間と共に思考し表現し，考えを広げ深められる授業を多く実践したことによると考える。一方，①の生徒の割合が教員，保護者よりも10ポイント以上低くなっている。学習の意義や価値の実感につなげる評価(パフォーマンス課題やOPPA等)などを工夫し，積極的に評価を生徒に返していく必要がある。

### (2)　研究の成果を具現化した生徒の姿

④～⑥のいずれの項目も肯定率がおおむね良く，良好な結果になっている。特に⑤の項目については，保護者・生徒の評価が高い。これは②の項目にある「協働的な学び」の成果と考える。一方，教員は④の項目の評価が低く，「自己調整力」や「ねばり強さ」についてやや課題があると見ている。生徒の主体性を大事にしながら，継続的な指導をしていく必要がある。

**表１　教員の自己評価及び生徒・保護者へのアンケート**

| 具体的な評価指標 | | 肯定率(ポイント | | | 総合(平均値) |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 教員 | 保護者 | 生徒 | |
| 取組指標 | ①　個々のよい点や可能性を見付けて積極的に評価し，学習の意義や価値を実感できるようにしている。 | 91 | 94 | 81 | **88.7** |
| | ②　生徒が自己調整しながら学習を進める指導の個別化と学習の個性化を図るとともに，持続可能な社会の創り手となる協働的な学びの充実を図っている。 | 87 | 83 | 84 | **84.7** |
| | ③　教科等で学んだことを，学習や生活の様々な課題解決に生かす機会を設けている。 | 86 | 88 | 90 | **88.0** |
| 成果指標 | ④　周りに流されず感情や行動をコントロールし，自分の目標に向けて，最後までやり抜こうとする。 | 77 | 88 | 86 | **83.7** |
| | ⑤　相手の気持ちを想像し，相手の気持ちに寄り添い，思いやりを持って接しようする。 | 87 | 94 | 93 | **91.3** |
| | ⑥　現状を変える力を信じ，考える理想像を仲間と共有しながら人々の心を動かし，共に行動しようとする。 | 87 | 83 | 84 | **84.7** |

## 3　全国学力・学習状況調査（３年生４月実施）の結果を踏まえて

**表２・３**の評価の数値は，１（そう思う），２（どちらかといえばそう思う），３（どちらかといえばそう思わない），４（そう思わない），０（その他・無回答）のうち，１と２の割合を肯定率として示したものである。

表２では，質問紙の全項目で全国平均を，ほとんどの項目で本校の昨年度平均を上回り，おおむね良好であった。特に④のとおり，授業で，課題解決に自ら考えて取り組み，話合い活動で考えを深め，広げていると約９割が答えている。主体的に学習に取り組む態度が身に付いていることがうかがえる。昨年度の評価からやや低下しているのは，コロナ禍の中で，学習形態が制限されている時期があったためと推測するが，生徒の思考の深まりや広がりを意識した授業改善に更に取り組んでいかなければならない。

また，**表３**は，今年度の３年生が２年生時の１１月に実施したアンケートとの比較である。同一項目の②③については半年間で５％程度上昇している。また，①については大半の生徒が「やり遂げたてうれしかった経験」があることが，「やり遂げるようにしている」ことにつながっていることがわかる。

**表２　全国学力・学習状況調査の結果**

| 質　問　項　目 | 今年度(%)<br>(昨年度との差) |
|---|---|
| ①　自分でやると決めたことは，やり遂げるようにしている。 | 88.8<br>※昨年項目無 |
| ②　学校に行くのは楽しい。 | 92.0<br>※昨年項目無 |
| ③　自分にはよいところがある。 | 88.8<br>（＋ 4.5↑） |
| ④　生徒の間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。 | 88.8%<br>（－ 2.5↓） |

**表３　本校独自アンケート(R2.11)と全国学力・学習状況調査(R3.5)との類似項目の比較（同一生徒の変容）**

| | 質　問　項　目 | 変容(ポイント) |
|---|---|---|
| ① | (本校)　私は，物事を最後までやり遂げてうれしかったことがある。<br>(全学)　自分でやると決めたことは，やり遂げるようにしている。 | 95.1<br>⇓<br>88.8 |
| ② | (本校)　学校に行くのは楽しい。<br>(全学)　学校に行くのは楽しい。 | 87.0<br>⇓<br>92.0 |
| ③ | (本校)　自分にはよいところがある。<br>(全学)　自分にはよいところがある。 | 82.2<br>⇓<br>88.8 |
| ④ | (本校)　・友達の前で積極的に自分の考えや意見を発表することができる。<br>・友達に伝えたいことをうまく伝えることができる。<br>・友達と話し合うとき，友達の意見を最後まで聞くことができる。<br>(全学)　生徒の間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。 | 78.2<br>(3項目の平均値)<br>⇓<br>88.8 |

## 4　おわりに

研究実践により，「持続可能な社会」の実現に貢献する実践者となるための資質・能力が育ってきている，ということを学校評価などから見取ることができた。生徒は，他者と共に学び，考えを広げ，深め，それらを学習や更には生活の場面において生かすことに大きな意義があると理解できていることが分かる。

今後も一つ一つの課題を自分のこととして捉え，思考力・判断力・表現力を発揮しながらよりよい社会の実現のために，責任と自覚を持って行動に移していけるような資質・能力の育成に励んでいきたい。

# 第２章　最終年次研究のまとめ

これまでの研究を通した生徒の変容の具体や成果と課題については，各教科の実践によるところである。ここでは，各教科をまとめた研究の成果と課題，全校生徒へのアンケートを考察することを通して三か年の研究を振り返り，新しい学びの形をまとめる。

## １　各教科をまとめた研究の成果と課題から

表１　各教科における主な研究の成果と課題

| 教　科 | 成　　果 | 課　　題 |
|---|---|---|
| 国　語 | 生徒の課題意識や目的意識を大切にした学習課題の設定，文章に根拠を求め分析する読みと，自分自身の生活や経験と結び付けて味わう読みをつなげること，学びログを活用した学びの把握を行うことで，既有の知識の精緻化や読みの深まりにつながった。 | 題材から引き出される読みの視点や技法，生徒の課題意識や生活経験を想定し研究することが重要である。<br>ルーブリックや学びログの生徒への効果的なフィードバックの方法について検討が必要である。 |
| 社　会 | 現代社会の諸課題を教材化し教科横断的な単元設計を行うことや，思考スキルを活用し，対話の中で何度も検討して，公正な判断に基づく最適解を目指す活動，ジグソー学習等の明確な役割分担のもとに課題に迫ることで，多面的・多角的な考察や構想を行い，自ら解決する自覚を持って課題に関わることにつながった。 | 話合いでは，生徒同士だけでは到達できない領域に教師の適切な関与により生徒を引き上げることが必要である。<br>集めた情報の伝達で終わらせず，情報を分析・解釈し，自分の考えとして述べられる思考力・判断力・表現力の向上のための指導を工夫する必要がある。 |
| 数　学 | 生活の中の事象を数学的に分析する課題を追究することや，OPP シートを活用すること，学びを活用する場面を想定して整理することで，既有の知識や経験を活用して解決に向かったり，自らの問題発見・解決プロセスを振り返って評価・改善したりすることにつながった。 | 小中まで見通した生徒のレディネスを把握し，目的を明確にしたパフォーマンス課題の設定を行うことが重要である。<br>思考や表現にじっくり取り組ませることも大事だが，重要なことを端的に述べる力を育てることも大事。 |
| 理　科 | 教科の枠を越えた探究課題・生活経験での疑問を基にした学習課題に取り組むことや，目的を明確にした問いから事実・理由付けを行うことで，既有の知識や経験が結びついた主張になり，学ぶことと人生や日常・社会とのつながりを実感し，持続可能な社会を構成していく一員として問題解決に取り組むことにつながった。 | 理科だけでなく他教科との横断的な授業や，学校全体としての指導計画の見直しなど，カリキュラムマネジメントに取り組んでいくことが必要である。 |
| 音　楽 | 各学校段階の学びの連続性・系統性に重点を置いた題材構成や授業の展開を工夫すること，多様な表現方法を用いて音楽活動と言語活動の往還を図ることで，音楽の学習で身に付けたことを，発達段階に応じて更に深めることができた。 | 小・中学校の児童生徒の発達段階を把握し，指導の連携を図るための具体的な手立てや効果的な年間指導計画の活用の方法などを検討することが必要である。 |
| 美　術 | 思考の流れを意識したワークシートの作成や，自己の考えを書く活動と集団での話合い活動を工夫することで，自分の考えや価値観に深く向き合ったり，新たな価値観を生み出すきっかけを得たりすることにつながった。 | 生徒の表現が，教師が用意した内容の中での高まりにとどまらないように，生徒自らの溢れ出る思いの表現に至る手立ての工夫が必要である。 |
| 保健体育 | 多様な視点を基に題材を捉えさせる授業展開や，学んだことを実際の行事の企画に活用する場面を設定すること，既有の知識や経験を基に話し合ったり，アドバイスをしたりする授業を構想することで，新たな視点を基に運動やスポーツへの見方や考え方を広げたり，目的意識を持って協働して課題解決に取り組むことができた。 | 知識や経験が少ない生徒に対してさらに個に応じた声掛けをしていく必要がある。<br>いろいろな表現方法は認めつつも，文量の制限や記述させる内容の精選を行うことが必要である。 |
| 技術・家庭 | 立体を組み立てながらイメージを形にできる 3DCAD を用いて，製品の価値や改良点を話し合うことで，繰り返し試行錯誤しながら最適解に迫ることができた。<br>イメージマップを用いて，自分と題材とをつなげて課題を立てさせることや，習得・活用・探究の場面を設定することで，様々な視点から生活の | 限られた授業数の中で，生徒の発達段階に合わせた適切な課題に繰り返し取り組ませるためにも，三年間を見通した指導計画の工夫が必要である。 |

| | | |
|---|---|---|
| | 中に問題を見付け，その解決に向かうことにつながった。 | |
| 英　語 | 挿絵を説明させたり，本文にない情報を織り交ぜた導入を聞かせたりすることで，内容を自分なりにアレンジしながらまとめることや相手の意見に関連させて意見を述べることにつながった。また，役割分担による追究活動により，内容を社会の出来事や自分の経験と結び付けて考え，自分の言葉で表現することにつながった。 | 状況を説明するための，語彙や話型を提示するなどの工夫が必要である。<br>物語を深く読ませる視点を示したり，物語を通して学ばせたいことに気付かせたりする教師のコーディネートの工夫が必要である。 |

## 2　全校生徒への意識調査から

本校の研究について，全校生徒を対象にアンケートを実施した。アンケートは，**表２**中における①～④の内容について，下のア～エの項目に対する考えを１～４で評価したものである。

ア　自分の見方や考え方，学び方が深まったり広がったりした
イ　その学習はやりがいがあった
ウ　その学習をするのは大変だった
エ　その学習を通して，よりよい学習や生活，社会にしていくことに向かうことができた

**表２　研究についてのアンケート（12 月　全校生徒 382 人実施）**

**※回答　４（そう思う）　３（だいたいそう思う）２（あまりそう思わない）１（まったくそう思わない）**

**※表中数値は４・３を合わせた割合（%）**

| | アンケート内容　　項目 | ア | イ | ウ | エ |
|---|---|---|---|---|---|
| ① | 教科などの学習において，自分の考えの根拠を持って，自分の持っている知識や経験と結びつけていく授業を工夫したことについて | 92 | 91 | 81 | 88 |
| ② | 教科の学びを他の教科の学びにつなげる学習や，行事などを通して他者（友人・先輩後輩・幼小特支の人たち・学校外の人たち）との関係づくりにつなげる工夫をしたことについて | 90 | 89 | 80 | 88 |
| ③ | いろいろな教科で，学習を通して身に付けた力が生かせるかどうかを，パフォーマンス課題などの問題を通して確かめていく工夫をしたことについて | 88 | 89 | 87 | 87 |
| ④ | いろいろな教科で，学びログや OPP シートをロイロノートやプリントを用いて行い，学習を通して新たに身に付いた見方や考え方，学び方などを振り返って意識したり，教科の学習を通して自分を見つめたりする工夫をしたことについて | 80 | 76 | 85 | 76 |

また，「どんなことをしているときに，学びがとても充実した，楽しかった，もっとしてみたいと感じたことがあったか」という質問に対する回答では，以下のような記述があった。

**既有の知識や経験を基にした学び合いを取り入れた学習指導の工夫について**

- 班で活動して自分の意見を発表したり仲間の意見を聞いて自分と違うところや自分になかったところがあったりしたときに学びが充実したと感じました。仲間と協力して課題を解決するときには楽しさも感じられました。
- 班活動や他者と協力をして学習する授業などは特に良かった。他者の意見を取り入れたり共に考えることで見方や考え方が変わったり絆を深めることができたと思う。
- 授業で自分たちで一から問いを考え，活発に意見交流する中で自分にない発想に触れたり根拠が明確な意見を聞いて納得したり考えが深まったりした。

**教科の学びをつなぐ学習について**

- 学んだことを他の人に説明したり，親に今日はどのようなことがあったり，できたりしたのかなどを説明したりする時に，授業で学んだ言葉や知識を使って説明することで実際に使うことができて嬉しい気持ちになる。
- 友達と活動をするときに，共に答えに近づいて行く時。（主に学活・道徳）
- 自分が普段から日常的に考えているようなことを学びを通して生かすことができるとき，とても積極的に自分から学びに向かおうとすることが出来たし，充実したと思います。

**実践や価値の実感につなげる評価（パフォーマンス評価・OPPA等）の工夫について**

- パフォーマンス課題をしている時，今まで一生懸命基本のことや習ってきたことをちゃんと生かせるか生かせないか知ることができた。毎回おもしろく，やりがいがあって，参考になる課題だからとても充実していると思った。
- 現実社会での場面や内容を想定して課題を立てて考えるとき。プリントなどを解いて考えるよりそっちの方が良く頭に入り実践でも使えると思った。
- 今まで自分が知らないことを発見したときや，パフォーマンス課題などで解決に向けて柔軟に考えられたとき。また，スピーチやレポートの書き込み量が四月と比べて増えた。
- OPP シートで単元を学ぶ前と学んだ後で同じ問いに答えるのだが，自分が学習前と比べて成長したと分かる。
- 学びログやOPP シートを振り返ったとき，沢山のことを学んで，充実していたな，と思いました。パフォーマンス課題を頑張って仕上げたとき，自分でも納得できるものができて，嬉しかったし，次も頑張りたいと思いました。
- 今まで習ってきた単元が終わった時に，全部がつながったとき、とても考えがすっきりした。

### 3　研究のまとめと新たな学びの形

これらのことから，三つの研究内容について考察する。

#### (1)　既有の知識や経験を基にした学び合いを取り入れた学習指導の工夫について

各教科の実践においては，教科の内容における根拠を基にしつつ，そこに既有の知識や経験を結び付けて題材，他者，自分自身とつながる生徒の姿が見られた。特に，三角ロジック等を用いた，教科の内容を軸にして，根拠を明確にして理由付けを行い主張することについては，多くの教科で実施しており，学校全体でも習慣化しつつある。このことは，学習における視点を明確にしたり，学び合いを確かで豊かにしたりすることにつながっていた。アンケートからは，多くの生徒がその学びに成果を感じており，協働して学習する中で互いの考えを伝えたり吸収したりすることのよさを味わっていたようである。

この取組から見えた，新たな学びの形のポイントを示す。

- 学習する単元や題材において，身に付けるべき資質・能力はもとより，教科の本質を明確にして，生徒に問うこと（単元の学習課題にすること）や，その問いに答える学びと振り返りを行うことで，教師・生徒共に学びの目的や意義を意識して学習を進めることができる。
- 学びと出合う生徒の既有の知識や経験を想定し，授業の展開からそれを引き出すこと，また，教科の内容を根拠にすることを軸として，そこに既有の知識や経験を結び付けることで，実感を伴った理解ができるようになる。それは，学びの記録への表現の確かさや豊かさに表れ，学びの把握や調整，成長の実感につながる。
- 自分の考え（主張）には，根拠を明確にして理由付けを行わせることで，主張がより確かで豊かになる。さらには自分の考えに責任を持ち，主体的な問題解決につながる。
- 授業における課題解決の際には，個人の考えを持った上で，協働して問題解決に向かう学習形態等の工夫を行うことで，一人では持ち得なかった考えや多様な考えに触れ，よりよい問題解決に向かうことができる。

これらの学びの形は，本研究で目指していた「既有の知識や経験でつながる深い学びの創造」そのものであり，この学びを習慣化することによって，主題に掲げる生徒の姿に迫ることができると考える。

#### (2)　教科の学びをつなぐ学習について

他の教科と学びをつなぐことについては，教科横断的な学習として，持続可能な社会を目指した課題を設定し，協働学習を通して課題に迫ったり，専門家から直接学びに対するアドバイスを受けたりして，課題を自分ごととして捉え，解決していこうとすることができた。その中で，生徒は教科での学びや自らの知識や経験を活用して題材，他者，自己とつながることができていた。アンケートの回答からも，多くの生徒が課題解決の困難を乗り越えて，その成果ややりがいを実感していたようであり，主体的に持続可能な社会の実現に貢献する実践者の姿を垣間見ることができた。

一方，多様な他者と学びをつなぐことについては，昨年度に引き続き，コロナウイルス感染防止対策の影響の中，普段の教育活動にも制限がかかることで，対面で多様な他者とつながる機会を持つことが

困難であった。その中で，先述のような，講師とオンラインツールを用いてつながる工夫をすることができた。学校行事においても，校外のいろいろな人と直接つながることはできなかったが，オンラインツールを用いて話を聞いたり，質問したりするなどの関わりを持つことはできた。研究としての取組や成果は，まだまだ道半ばである。

**(3) 実践や価値の実感につなげる評価（パフォーマンス評価・OPPA 等）の工夫について**

パフォーマンス評価・OPPA による評価の具体は各教科の実践によるところである。それぞれの教科において，社会や生活における課題や持続可能な社会を目指した課題を設定し，その解決に向けて既有の知識や経験，その単元で学んだ内容を活用していく生徒の姿が見られた。また，OPPA については，学びの把握を記録することや，本質的な問いに対して自分の考えを主張することを通して，学びの調整を図ることや学びの意義を実感することができていた。そして，その記録を積み重ねていくことで，主張を視点を明らかにして表現することもできるようになってきた。アンケートの回答などからは，そのよさや成長の実感について触れる記述もあったが，数値で見るとやりがいが他項目と比べて低く，負担感が高かった。生徒は，すべての教科において毎時間記録していくことに負担を感じていたようである。評価の在り方については検討していく必要がある。

この取組から見えた，新たな学びの形のポイントを示す。

- (1)での取組を引き出す学習課題やパフォーマンス課題について，持続可能な社会を目指すような，社会や生活における課題を工夫して取り上げることで，生徒は目的意識を持って単元や授業の課題に取り組むことができる。
- 課題はその単元における教科の本質を見据え，知識や技能を活用して解決していくものであるか吟味するとともに，小中あるいは高校の学習にどうつながっているかも調べておくことが重要である。
- OPPA では，単元構想の段階で，生徒にとって何ができるようになるのか，何を学ぶのか，どのように学ぶのか，構想・指導・評価が一体となった学びのパッケージを設計することが重要で，その視点から適切な評価をすることで，生徒は学ぶ意欲や意義を持ち主体的に学習に取り組むことができる。

(1)～(3)に関わることのうち，ICT の活用は大きく効果を上げていた。思考の可視化を図りよりよい表現につなげることや，その学びを共有・蓄積することで自らの学びを振り返ることにおいて，ロイロノート等の活用は大変効果があった。作成や入力は OPPA 同様負担のバランスを考慮する必要があるが，さらに効果的な活用について研究を進めたい。

## 4 今後の研究の展望

三年間の取組を通して，教科で設定した目指す生徒の姿が，課題追究の過程で随所に見取ることができた。また，生徒の思考や表現についても，各教科での研究実践を通して，視点を明確にした主張ができるようになり，確かな生徒の育ちを見取ることができた。

これからの子どもは，将来の変化を予測することが困難な時代を生き抜かなければならない。さらに，将来を見通したよりよい社会を創るために，現在自分たちが置かれている状況を踏まえながら，様々な問題を解決していくことが求められるであろう。このような持続可能な社会を形成する一員となるためには，一つ一つの課題を自分ごととして捉え，既有の知識や経験，スキルをもとに，思考力・判断力・表現力を発揮して，よりよい解決方法を考えるとともに，その実現に向けて最善を尽くすことができるという，資質や能力を育む必要がある。

そして，主体的に持続可能な社会を形成していくためには，それらに加えて，明確な目標を設定し，その実現のために責任と自覚を持って行動に移すことのできる実践力を身に付ける必要があろう。このような持続可能な開発のための教育（ESD）の視点に立った実践力を学校全体で体系的に育むことは，これからの時代に求められる学びの形を創り出す上でも，その学びを通して，将来をよりよく生き抜く資質や能力を高める上でも重要であると考える。

このような研究の理念はこれからも変わらない。今後は，各教科での検証から見えた成果と課題をもとに，必要な研究の方策について更に議論し，研究に励んでいきたい。

# お わ り に

愛媛大学教育学部附属中学校　副校長　吉本　浩司

令和元年末から世界中で猛威を振っている新型コロナウイルスは、収束の見通しが未だ立たない状況です。この影響により、令和２年には、政府によって３か月にも渡る全国一斉の臨時休業が行われるなど、教育活動にも甚大な影響を与えています。前例のない事態に、各学校においては今もなお、感染拡大防止に細心の注意を払いながら、手探りの状態で、臨機応変に教育活動を進めていることと思います。

本校でも、２年研究の最終年次であった令和２年度、開催を予定していた第１００回愛媛教育研究大会をやむなく延期し、研究期間も１年延長しました。紆余曲折ありましたが、諸方面の皆様にお力添えをいただきながら研究を進め、ここに、３年研究の最終年次の研究成果を御報告できますことを深く感謝申し上げます。

今年度、中学校では、新しい学習指導要領が全面実施となり、ＧＩＧＡスクール構想の前倒しで、生徒に一人１台のタブレット端末の整備が急速に進められ、教育は大きな転換期を迎えています。令和３年１月には、中央教育審議会から、従来の学校教育を発展させ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実する「令和の日本型学校教育」が示されました。今、子供たちが自分のよさや可能性を自覚し、他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越えるとともに、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となる力を育てることが求められています。

このような状況の中、本校では、「持続可能な社会の実現に貢献する実践者の育成―既有の知識や経験でつながる「深い学び」の創造を通して―」を研究主題に掲げ、①既有の知識や経験を基にした学び合いを取り入れた学習指導の工夫、②教科の学びをつなぐ学習、③実践や価値観の実感につなげる評価（パフォーマンス評価等）の工夫の３点に力点を置き、研究を進めてきました。特に、授業改善においては、資質・能力の向上を目指し、生徒自らが自分の可能性を信じ、よりよい社会や人生を自ら切り拓く力を育てるため、学びを次の学びや生活に生かすＯＵＴＰＵＴ中心の学びへのシフトを重視してきました。今回行った学校評価アンケートでは、「学びを他に生かす経験」、「思いやりのある共感力」、「自己効力感と感化する力」の各項目で、教員、生徒、保護者のほぼ９割が「成長した」と肯定的に評価しています。よりよい社会の実現を目指し、様々な課題を自分ごととして捉えて、よりよい解決方法を考え、行動しようとする意識の高まりに、目指してきた「持続可能な社会の実現に貢献する実践者」の育成への確かな手応えを感じているところです。

生徒の日々の育ちを励みとしながらが、研究に一丸となって取り組む「チーム附中」は、教育研究大会で賜りました貴重な御意見・御指導を次期研究に生かし、今後も、これからも時代をリードする教育実践のモデル校として、実践研究に邁進したいと思います。

結びに、御後援をいただきました愛媛県教育委員会、愛媛県市町教育委員会連合会、松山市教育委員会、愛媛県小中学校長会、愛媛県教育研究協議会をはじめ、御支援・御助言いただきました多くの方々に心より感謝申し上げますとともに、今後とも、本校の教育推進に御理解・御助言を賜りますようお願い申し上げます。

# 研究同人及び愛媛大学研究パートナー

校　長　日野　克博　　副校長　吉本　浩司

| 教科領域 | 研　究　同　人 | 愛媛大学研究パートナー |
|---|---|---|
| 国語科 | 細川　美保・兵頭　宣彦<br>丸山　佑樹 | 三浦　和尚 |
| 社会科 | 高橋　祐貴・江角　紀行<br>萩山　知治 | 井上　昌善・鴛原　　進 |
| 数学科 | 宇都宮憲二・冨永　剛志<br>山本　泰久 | 觀音　幸雄・河村　泰之<br>吉村　直道 |
| 理科 | 沖野　俊也・真木　大輔<br>山根　典之 | 中村　依子・中本　　剛<br>細田　宏樹・向　　平和 |
| 音楽科 | 三棟　優子 | 井上　洋一・楠　　俊明 |
| 美術科 | 大口　愛子 | 秋山　敏行 |
| 保健体育科 | 坪内　道広・古澤　龍也 | 糸岡　夕里 |
| 技術・家庭科 | 薬師神吉啓 | 大西　義浩・玉井　輝之<br>森　慎之助 |
| | 土手　佳代 | 竹下　浩子・藤田　昌子 |
| 英語科 | 河野　操・向井　俊博<br>髙田真奈実 | 池野　　修・立松　大祐 |

**表紙絵に寄せる思い**

## 章光堂と自然

1年　松本　文海

初めての青葉写生会、外で絵を描くのは気持ち良かったです。描く場所は、コーラス部の練習で使っていて愛着がある章光堂にしました。改めて章光堂をよく見ると、形や色が美しいと思ったので、できるだけ細かいところも忠実に描こうと心掛けました。

下絵は、線をまっすぐ引くことや、線を斜めに引いて遠近感を出すことなどに気を付けました。章光堂の色、木の幹や葉の色は、なるべく本物に似た色を作るために、何色も使って混色したり、少しずつ色を足したり、納得のできる色ができるまで試行錯誤しました。時間をかけて、丁寧に描けました。

**中表紙絵に寄せる思い**

## 正面から見たくなる伊佐爾波神社

2年　田中　陽奈

私は一年前から、「次回は伊佐爾波神社を描こう」と決めていました。なぜなら、伊佐爾波神社の鮮やかな朱色に惹かれたからです。そのため、絵を見た人が始めに朱色の部分に目がいくよう、そこを特に正確に描写し色を塗りました。また、私は題名にもあるように斜めからの風景を描きました。そのため、遠近感や陰影を大切にしました。

遠くにある程色は暗く、木をぼかすことで、より写実的に表現できました。伊佐爾波神社には細かいつくりが多くありましたが、諦めず、見たままを丁寧に描くことに努めました。今回の反省点やうまく表現できたことを生かして、次回は自分が納得できる最高の作品を作り上げたいです。

## お堀から望む県庁

3年　松原　　愛

今年の青葉写生会は、昨年より気合を入れて臨みました。なぜなら昨年度はライバルに負けて、大賞を取り逃してしまったからです。この悔しい思いを胸に、丁寧に絵を仕上げていきました。

私のこだわりとして、お堀の水質を表現するためにパサパサな筆で水独特のゆがみを出したり、石垣の石の隙間には画用紙の白の部分をわざと残してみたりと、たくさんの工夫をしました。

また、県庁というモチーフも描きごたえがあり、三年間の集大成として納得のいく絵に仕上げることができたと思います。

**2021 愛媛大学教育学部附属中学校研究紀要　第72号**
令和4年2月

**発行者**　愛媛大学教育学部
〒790-8577　松山市文京町3番
TEL　089-927-9371
愛媛大学教育学部附属中学校
〒790-0855　松山市持田町1丁目5－22
TEL　089-913-7841　FAX　089-913-7842

**印刷所**　株式会社　松栄印刷所
〒790-0003　松山市三番町7丁目9－2
TEL　089-941-3334　FAX　089-933-7911

表紙作品：青葉写生会　絵画（水彩）　「章光堂と自然」　1年　松本　文海
中表紙作品：青葉写生会　絵画（水彩）　「正面から見たくなる伊佐爾波神社」　2年　田中　陽奈
青葉写生会　絵画（水彩）　「お堀から望む県庁」　3年　松原　　愛

